

# 巻 頭 言

財団法人高輝度光科学研究センター  
理事長 吉良 爽



運営母体の一つである理研が2003年10月に独立行政法人となりました。もう一つの母体である原研は、いずれサイクル機構と合併して新しい独立行政法人となりますが、それを期にSPring-8の運営からは撤退することになりました。このように2003年は、SPring-8の新しい運営体制への過渡期の始まりの年であったといえます。

本格的利用期の認識が定着したのが2003年度でした。産業利用の体制についても、産業利用のコーディネーターを集めた利用支援室を独立させ、今後の産業利用の発展への体制を強化しました。これにより、産業利用の相談、支援、計画などが一段と発展したと思います。施設の

性能向上に関しては、トップアップ運転の2004年度の実行に向けて、最終的な準備が行われました。これまでは、ビームの強さが時間と共に減衰し、ある程度減衰したところで（例えば1日）再度電子を補充するということを行ってきましたが、トップアップ運転と言うのは、この補充を小刻みに行って、見かけ上ビームの強さを一定に保つ運転のことです。

SPring-8を地元企業に利用してもらうために、これまでトライアルユースのプログラムの活用などを行ってきましたが、2003年度はさらにこれを強めるために、兵庫県の地域結集研究事業に参加いたしました。これによって、そこに参加している地元企業へ直接貢献することが出来、また将来の交流の活性化にもつながると思います。また、兵庫県の2番目の専用ビームラインが承認され、徐々にビームラインの新設が行われることになったのは嬉しいニュースでした。これによって、地元の利用はもちろん広く産業利用が促進されると期待されます。

成果は年々伸びていますが、この年度に特筆すべきことは、LEPビームラインにおける実験で、五つのクオークからなる粒子が発見されたことです。これは世界的に大きな反響を呼びました。このビームラインはいわゆる放射光を発生するビームラインではなく、放射光と両立させるのが難しいのですが、SPring-8の加速器関係者の技術力でその活動を維持でき、この大成果に至ったことを嬉しく思っています。

2003年度の後半から、施設の課金問題が行政レベルで議論され始めました。決着は2004年以降に持ち越されますが、成り行きによっては今後の体制や運営に影響を及ぼす可能性があります。